明石の史跡（２２）神戸女学院の東方移転

　ゆたかな敷地を確保しながらも、女学院大学部は転進の道を選択したのだろうか。まず募募金の事情によるところがおおきかった。アメリカでの募金目標（７０万ドル）の達成に時間を要し、大正１５年（１９２６）末までに、目標額の３分の１（２０万ドル）にもおよばなかった。

　募金活動の成果が、十分ではなかったために、学校を２か所（大学部と高等部）にわけての経営には、困難を感じざるをえなかった。それは大正１３年（１９２４）３月、中部婦人伝導会総幹事リー夫人の現地視察をふまえての意見である。しかし同窓会の大蔵谷にたいする意向は、簡単には逆転できなかった。

　同窓会とは別に、一般教職員の内には、明石移転への反対が強かった。英語科主任飯塚恒太郎教授は「日本の青年は都会の学校にあこがれるのに、神戸の繁華が明石に及び大蔵谷が都会化する見込みはなく、生徒が文化を摂取し社会的に訓練される機会が得られない」という指摘は、移転派に強烈なインパクトを与えた。

　大正１５年１２月、財団法人神戸女学院設立の認可を獲得。翌昭和２年（１９２７）４月には、大蔵谷敷地の買収が終了し学院に寄付した。

　同年１１月７日、臨時理事会は校地委員会の答申にもとづき、全学東方移転を決定する。①山本通の校地・校舎及び大蔵谷の敷地をすべて売却し、②その代金の一部をもって新たに神戸市の東方、阪神間の住宅地域に敷地を買得し、③残りの金額を新校舎の建設費に加える、という方針が確立。

　昭和５年（１９３０）３月、学院は岡田山（西宮市）に新敷地を獲得。学舎建設については、竹中藤右衛門氏（竹中工務店）の好意（岡田山の購入代金を提供、大蔵谷敷地を引き取る）により、今日の基礎が造られたのである（神戸女学院百年史総説１６９－７２頁）。

日本歴史学会会員 茨木 一成